

越谷市郷土研究会・創立45周年記念

第412回史跡めぐり

平成23年1月3日（月）

『小石川七福神を詣でる』

——坂のある小石川の歴史を垣間見ながら——

真珠院境内の宝船石仏



小石川七福神コース（4キロ） 平成23年1月3日（月）8：30 越谷駅東口集合

越谷駅（8：42、中央林間行き）→大手町（丸ノ内線）→茗荷谷（トイレ休憩）→改札出口「出口2」
茗荷坂→林泉寺（しばられ地蔵）→深光寺（恵比寿、切支丹灯籠）→徳雲寺（男弁財天）→極楽水
（弁財天、白蛇）→宗慶寺（寿老人）→真珠院（布袋尊）→福聚院（大黒天、とうがらし地蔵）→伝通院
（お大の方、千姫、浪越徳治郎の指塚、トイレ休憩）→ムクの木（老樹の神木）→沢蔵司稻荷（霊窟）
→善光寺坂→源覚寺（毘沙門天、こんにやく閻魔）→東京ドーム（福祿寿）【12：30、現地解散】
[帰途例] 水道橋（JR）→錦糸町（半蔵門線）→越谷駅、or 水道橋駅（三田線）or 後楽園駅（丸ノ内線）

茗荷谷のいわれ

茗荷谷^{みょうがだに}とは、東側の小石川台地と西側の小日向（こひなた、昔は「こびなた」）台地との間にある浅い谷をさし、江戸時代、その周辺には、茗荷畑が見られたから名付けられたという。

茗荷坂

茗荷坂^{みょうがざか}とは、茗荷谷にある坂道で、本来は茗荷谷の拓殖大学正門前から南西に小日向台地へ上る坂をいうが、今日では、地下鉄茗荷谷駅の拓殖大方面出口から下る坂をも含まれるようになった。

林泉寺の「しばられ地蔵」

林泉寺^{りんせんじ}では、人々が願いをかけるとき地蔵尊を縄でしばり、願いが叶うと縄をほどくとう信仰が見られた。江戸時代の『江戸砂子』によると、「しばり地蔵」なっているので、本来は「しばり地蔵」と呼ばれたのかもしれない。「しばられ地蔵」は、水元公園近くの南蔵院も有名である。

1. 深光寺（恵比寿）

深光寺^{じんこうじ}の本堂前に祀られている恵比寿尊の石像は、従来の祀られていた恵比寿の絵図の前立ちとして作成されたものである。

恵比寿尊の向かって右隣には、「切支丹灯籠」と言われる織部型灯籠がある。織部型灯籠は、安土桃山時代から江戸時代にかけての大名であり茶人でもある古田織部が好んだ形の灯籠で、全体の形状は十字架を、竿部の彫刻はマリア像を象徴しているという。

墓地入口には、「南総里見八犬」で有名な滝沢馬琴の墓がある。台石には、家型の模様をした馬琴の蔵書印が刻まれている。

馬琴の墓の向かって左側後方には、晩年、失明した義父の馬琴を助け、南総里見八犬伝を完成させた、長男の嫁の路女（みちじょ・お路）の墓がある。上部には「瀧澤氏墓」、戒名は「操誉順節路霜大姉」と刻まれている。

なお、滝沢馬琴は、越谷吾山（『方言学の祖』）の門人となって俳諧を学んでいる。



藤坂

藤坂^{ふじざか}の坂下には藤寺と呼ばれる伝明寺^{でんみょうじ}がある。三代将軍家光が鷹狩の帰りに立ち寄った時に、庭一面の藤を見て「藤寺」と名付けたとのいわれがある。

藤坂の坂上からは、富士山が見られたという。それゆえ、本来は富士坂と書くのかもしれない。

藤寺の門前には、江戸時代初期の「三猿庚申塔」がある。

2. 徳雲寺（弁財天）

徳雲寺の弁財天のお姿は、蛇（白蛇）がとぐろを巻いた人頭蛇身で、頭は（老翁）の顔をしているので、「男弁財天」と呼ばれている。学問的には、「宇賀神」とよばれる石像である。頭は老翁か女性かの二種類が見られる。水神信仰の宇賀神は弁才天信仰と習合していたので、弁才天と同一視することができる。



正面に鳥居のつく冠を冠るものあり



弁才天

弁才天と宇賀神との習合の代表例が、八臂（腕が八本）の姿をした弁才天で、頭上には鳥居と宇賀神を戴いている。右図は鳥居が省かれている。（右図は、北辰堂発行「仏像見わけ方事典」235頁より抜粋）

播磨坂

播磨坂は、第二次大戦後にできた坂で、この地にあった松平播磨守の上屋敷にちなみ、播磨坂と名付けられた。現在、地元の人々の手で育てられた立派な桜並木が見られ、「文京さくらまつり」が毎年行なわれている。

この坂から見下ろす前方低地には、「播磨田んぼ」が広がり、その中には小石川植物園（江戸時代は、赤ひげの小石川養生所で知られる小石川御薬園、それ以前は綱吉の白山御殿）も見られ、玉川上水から分かれた千川上水（現在の千川通り）が流れていた。

高橋泥舟と山岡鉄舟の旧居跡（現在のグランヴェール小石川播磨坂マンション、VILLE neuve 小石川播磨坂マンション）

「維新の三舟（幕末三舟）」とは、高橋泥舟、山岡鉄舟、勝海舟の三人である。泥舟は槍術家、鉄舟は無刀流の創始者で書道にたけ、海舟は咸臨丸を指揮して渡米し、海軍操練所を設立する。山岡と高橋は、隣同士に住み密接な関係となっていて、さらに勝海舟ともつながりがある。

つまり、高橋泥舟の兄は槍術の大家山岡静山の弟であるが、山岡鉄舟は兄の静山に槍を習い、静山の妹と結婚して山岡家を継いでいるので、義理の兄弟ということになる。

さらに、高橋泥舟は、大政奉還した慶喜の身辺警護にあたっている。山岡鉄舟は、勝海舟の使者として江戸城無血開城のため、西郷隆盛に会って説得し、勝海舟との会談を成立させた。

3. 極楽水（弁財天）

かつては南東隣にある宗慶寺の境内地であったが、現在は小石川パークタワーの敷地内にあり、白蛇のお姿を祀る祠がある。蛇は弁財天の使いである。

極楽水に関するいわれによると、のちに伝通院を開山することになる了譽上人の所に仏法を教えてもらおうと童女が現れ、そのお礼に「極楽の井」と呼ばれる泉の名水を与えたとされる。

4. 宗慶寺（寿老人）

宗慶寺には、寿老人が祀られている。かつては、境内地が今より広く、極楽水を所有していた。

平成七年に発足した小石川七福神のうち、最後まで見つからなかったのは寿老人であるが、この寿老人を新たに祀って発足に漕ぎ着けたのが宗慶寺である。

5. 真珠院（布袋尊）

本堂の右手の階段を上った所のお堂にも祀られているが、本堂下の通路を抜けると裏手が墓地となっていて、奥には大きな布袋尊の石像が祀られている。また、「阿弥陀二十五菩薩来迎」の石像群の岩山があり、圧巻である。庭園も見どころである。

境内側には宝船の石像がある。



・宝船

七福神は、最初、七福神を宝船に乗せた絵から一般に広まったと考えられている。初夢は、江戸では仕事始めの正月二日の夜に見る夢である。七福神に乗せた宝船の絵を正月二日、枕の下に入れて寝ると、「一富士二鷹三茄子」というように縁起のよい夢を見ることが盛んに行われるようになった。宝船のことを「お宝」といい、正月二日、お宝を江戸の町に売り歩く「お宝売り」の呼び声が町中に賑わったという。この宝船の絵に

「なかきよの とをのねふりの みなめさめ

なみのりふねの おとのよきかな」

（長き夜の、唐の眠りの、皆目覚め、 波乗り船の、音の良きかな）

という五七五七七の短歌を書き添えている。

この短歌は、上から読んでも下から読んでも同じ文となる回文（かいぶん、かいもん）である。聖徳太子の作との伝えがある。



6. 福聚院（大黒天）

福聚院の大黒天は江戸時代から知られ、甲子の日にお参りすれば商売繁盛すると言われ賑わっていた。

本来の大黒天は武神であり、福聚院の大黒天は「数少ない古式武装神スタイルを整えていることと、その製作年代を鎌倉時代に遡ると考えられることなどを含め貴重な文化財である。（中略）本来は仏法護持の戦闘神として憤怒形をしているものであることを考えると、この大黒天像は本来のスタイルを尊重している坐像であるといえる。」（平成18年3月 文京区教育委員会作成の掲示板より）としている。

福聚院には、門をに入って左側に「とうがらし地蔵（せき止め地蔵）」がある。この地蔵をお参りすると咳が止まり、止まったお礼に唐辛子を下げるのである。つぎのような言い伝えがある。

「明治の中ごろ、とうがらしの好きなおばあさんが持病のぜん息に苦しんでいたが、医者からトウガラシを止められていたにもかかわらず食するうちに亡くなった。そこで近所の人があわれんで地蔵尊を造りとうがらしを供えた。その後、ぜん息に苦しむ人々が祈願すると治り、お礼にトウガラシを供えるようになったと伝わる。」（文京区・文京の観光案内「福聚院大黒天」より）

新撰組の前身、浪士隊結成の地・処静院跡

幕末、浪士隊の結成が、ここ処静院で行われた。浪士隊は京都守護職のもとで活動した新撰組の前身である。隊結成にあたり、中心となった人物は清河八郎で、幕臣の山岡鉄舟が取締の職に就いた。鉄舟と懇意であった処静院の住職は、結成の趣旨に賛同し、結成の場所として本院を提供したのである。隊員の中には、近藤勇・土方歳三・沖田総司なども含み、総勢250名程で京都に上った。

伝通院 (でんづういん)

家康の生母、お大^{だい}の方^{かた}の菩提寺として建てられ、お大^{だい}の方^{かた}の法名(戒名)「伝通院殿」から俗称「伝通院」と呼ばれるようになった。以後、徳川家の子女や側室などが眠る寺院として知られる。正式名は、無量山傳通院寿経寺である。

また、関東十八檀林の一つで、浄土宗の学僧の修行勉強の場ともなっていた。他には、港区の増上寺、岩槻区の浄国寺などがあげられる。

・お大(於大)の方(徳川家康の生母)の墓

徳川家康の生母。三河(愛知県)刈屋の城主・水野忠政の娘。岡崎城主松平広忠と結婚、翌年に家康を生む。後に離婚して阿古屋城主に再婚するも人質として織田方や今川方を転々とするわが子家康を慰め、音信を絶たなかったという。

・千姫の墓

二代将軍秀忠の娘。七才の身で豊臣秀頼に嫁いで大阪城に入る。大坂夏の陣の落城の際に脱出する。翌年、家康の勇猛な家臣である本多平八郎忠勝の孫、本多忠刻と再婚するも死別。江戸に帰り竹橋に住む。吉田御殿の乱行の物語は千姫に対する誤った偏見を植え付けてしまう俗説で、全くの作り話である。

右の記念切手の図案は、千姫・平八郎恋文交換の絵である。本多平八郎と千姫との出会いを表す絵とされてきた。この場合の平八郎とは本多忠刻を指す。向かって右が三つ葉葵の紋が見られる千姫、左の女性が、千姫からの恋文を仲立ちとして受け取る身分の低い女性。さらに左方に、その千姫からの恋文を待ち受けている若衆姿の本多平八郎が描かれている。作り話である。



・指塚

かつてテレビで一世を風靡した「指圧の心、母心」の故・浪越徳治郎氏の指塚がある。伝通院近くの現在地に來たのは昭和13年である。2年後に日本指圧学校(現、日本指圧専門学校)を開校し、指圧術の伝授に務めた。昭和45年に建てられた指塚は、浪越氏の右手親指を拡大したものである。

読売新聞 昭和50年(1975)8月18日の記事より

読売新聞 昭和50年(1975)8月18日の記事より



善光寺坂

平成13年3月作成の文京区教育委員会の解説板には、次のように書かれている。

「坂の途中に善光寺があるので、寺の名をとって坂名とした。(略) 明治17年に善光寺と改称し、信州の善光寺の分院となった。したがって明治時代の新しい坂名である。

坂上の歩道の真ん中に棕(むく)の老木がある。古来、この木には坂の北側にある稲荷に祀られている、澤蔵司(たくぞうす)の魂が宿るといわれている。

なお、坂上の慈眼院(じげんいん)の境内には礪川(れきせん、後樂園駅そばに礪川公園がある)や小石川の地名に因む松尾芭蕉翁の句碑が建立されている。

“一(ひと)ひぐれ 礪(つぶて)や降りて 小石川” はせを(芭蕉)

また、この界限には幸田露伴・徳田秋声・島木赤彦(しまきあかひこ)・古泉千樞(こいずみちかし)ら文人、歌人が住み活躍した。」

「赤堀割烹教場」(あかぼりかつぼうきょうじょう)の石柱

わが国で一番古い料理学校とされる赤堀料理学園の創設者の赤堀峯は割烹着を考案し、洋食をわが国に普及させた人物である。もとは、日本橋に教場があったが、関東大震災で焼け、現在地に移ってきた。

老樹の神木・棕(むく)の木

この棕の木は、かつては澤蔵司稲荷の境内にあったが、区画整理された後に、この大木だけが残され、推定樹齢は400年近いようである。澤蔵司という僧侶の魂が宿っているとされ、澤蔵司稲荷の神木となっている。

沢蔵司(たくぞうす)稲荷

ここの奥に、狐が住んだという霊窟(おあな)と俵の上に乗った大黒天石像がある。

昭和56年9月作成の解説板には、次のように書かれている。

伝通院の学寮(梅檀林せんだんりんといって修行するところ)に、沢蔵司という修行僧がいた。僅か三年で浄土宗の奥義を極めた。元和六年(1620)五月七日の夜、学寮長の極山(ごくさん)和尚の夢枕に立った。『そもそも余は千代田城の内の稲荷大明神である。かねて浄土宗の勉強をしたいと思っていたが、多年の希望をここに達した。今より元の神にかえるが、永く当山(伝通院)を守護して、恩に報いよう。』と告げて、暁の雲に隠れたという(『江戸名所図会』『江戸志』)。

そこで、伝通院の住職廓山上人(かくざんしょうにん)は、沢蔵司稲荷を境内に祭り、慈眼院(じげんいん)を別当寺(べつとうじ)とした。江戸時代から参詣する人が多く繁栄した。

『東京名所図会』には、『東裏の崖下に狐棲(こせい、狐の住む)の洞穴(ほらあな)あり』とある。今も霊窟(おあな)と称する窪地があり、奥に洞穴があつて、稲荷が祭られている。」

伝通院の門前のそば屋に、沢蔵司はよくそばを食べに行った。沢蔵司が来たときは、売り上げの中に必ず木の葉が入っていた。主人は、沢蔵司は稲荷大明神であったのかと驚き、毎朝『お初(はつ)』のそばを供え、『いなりそば』と称したという。

また、すぐ前の善光寺坂に棕(むく)の老樹があるが、これには沢蔵司がやどっているといわれる。道路拡幅のとき、道をふたまたにしてよけて通るようにした。

沢蔵司 てんぷらそばが お気に入り (古川柳)

善光寺

善光寺坂のいわれとなった寺院。現在は直線の坂道となっているが、旧坂は、途中、この寺院の二つある赤門^{あかもん}の東側に沿って迂回するようにして下る坂道である。

7. 源覚寺（毘沙門天）

俗に「こんにやく閻魔」と呼ばれる源覚寺^{げんかくじ}境内の毘沙門堂には、木造の毘沙門天像が祀られている。

・こんにやく閻魔

文京区教育委員会の解説版によると次のとおりである。

「源覚寺に伝わる閻魔像で、閻魔堂に安置されている。右眼が黄色く濁っているが、閻魔王が信心深い老婆に己の右目を与え、老婆は感謝のしるしとして『こんにやく』を供奉続けたという言い伝えがある。」

「このことから、眼病治癒の『こんにやく閻魔』として庶民の信仰を集めた。像は高さ100.4cm。ヒノキ材の寄木造りで、彩色を施し、玉眼が嵌入（かんにゅう）してある。（略）鎌倉時代の作と思われる。（略）彫刻美術品として優れているとともに、本区所在の仏像の中で、古い製作年代に属するものとして貴重な文化財である。（後略）」

・塩地藏

歯痛平癒祈願の塩地藏である。

礫川（れきせん）公園

当該地区の地形は、小石川台地の東端と千川（小石川）、江戸川（現在の神田川）がつくった低地から成り立っている。また、台地の端には急な崖や坂が数多く点在し、坂の名前の由来には、地域性や歴史、昔の風景が偲ばれ、そこに住んだ人々の生活の姿が浮かんできます。

礫川（れきせん）の名称の由来は、昔、千川、江戸川及び周囲の高台から流れ出た細流が現在の後楽園付近で合流していた。これらの川は砂や小石が多いことから、この付近一帯を小石川村と呼ぶようになった。礫川の礫とは、小石（礫／れき・つぶて）が多い川「小石川」に由来している。（以上、礫川地域活動センターの「地勢」より抜粋）「礫川」は小石川のことで「れきせん」とか「こいしかわ」と読む。

このあたりの春日の地名は、徳川家光の乳母春日局が拝領し町屋にしたことから名づけられた。礫川公園には春日局の銅像がある。

駅に近い植え込みには、サトウハチローにちなんだハゼノキや、幸田文ゆかりのハンカチノキが植栽されている。

8. 東京ドーム（福祿寿）

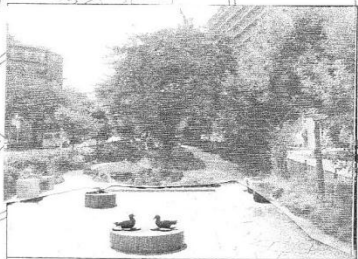
水戸徳川家上屋敷として、二代光圀の時に完成した現、後楽園庭園に、かつては福祿寿が祀られていた。庭園続きの屋敷地に威容を構える東京ドームは、野球の殿堂、ラクーア、アトラクションズ、ホテルなど総合娯楽センターである。前記の縁で再祀される福祿寿は、22番ゲート前の総合案内所横、クリスタルポイント（ガラスの三角塔）を廻り込んだ奥、植え込みの中にある。

（小石川七福神会事務局真珠院発行の「小石川七福神めぐり」パンフレットより抜粋）

主な参考文献：「江戸東京七福神めぐり」（日本出版社）、小石川七福神会発行「文京 小石川七福神」読売新聞（昭和50年8月18日）、教育委員会が作成した各種解説板



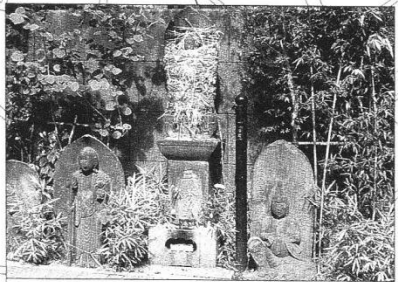
スタート
CV
みょうがだに
しばれ地蔵が
安置されている
小日向(四)
林泉寺
1 深光寺
2 徳雲寺
3 極楽水
4 宗慶寺
共同印刷
小さな祠が
マンションの
庭に置かれている
吹上坂
Eisai
小石川(四)
学芸大附属
竹早小
小石川局
伝通院の塀に沿って
坂を下る
福聚院 6 祀
竹早高
伝通院 祀
WC
淑徳学園
高・中
善光寺 祀
善光寺坂
小石川(三)
小石川(二)
源覚寺 7 祀
CV
こんにやくえん
富坂警察署
古いお寺を見ながら
ゆっくり坂を下っていく
第三中
中央大
理工学部
春田(一)
小石川後楽園
小石川後楽園
東京ドーム
Tokyo Dome
City
後楽園ホール
東京ドーム
ホール
ウインズ
WC
東京ドーム
ホテル
外堀通り
すいどうばし
水道橋
御茶ノ水



江戸時代、松平播磨守の上屋敷があったことから播磨坂という地名がついた。昭和35年(1960)に桜の若木が植えられ、現在に至る。今ではおよそ130本の桜が春になると咲き誇る

慶長7年(1602)創建、伝通院の塔頭で縁受院と称していたが、明治17年(1884)に善光寺と名前を改めた

※善光寺坂を下りると、今までは打って変わって繁華街となる。



深光寺のすぐ先の林泉寺には、しばれ地蔵が建っている。江戸時代、願いをかけるときにこの地蔵尊を縄で縛り、願いが叶ったら縄を解くといわれた



源覚寺境内には体を清める意味から地蔵尊の体に塩を盛り、健康を祈願したという塩地蔵尊もある



東京ドームの福祿寿は、ドームの22番ゲート近くに祭られている。案内板も建っているが、見つからなかったら総合案内所へ

上記の地図を作成するにあたって「江戸東京七福神めぐり」(日本出版社) 67頁の地図を利用しました。